

# 仏説阿彌陀經

⑤



満井秀城  
本願寺派司教

## 証誠段・流通分

東南西北上下の六方におられる仏さまがたは、三千大千世界を覆うほどの長く長い舌を出して、お釈迦さまが説かれた阿彌陀仏のすぐれた徳をほめたたえてくださっています。ものすごく壮大なスケールの出来事です。

今回は、『阿彌陀經』に六方の仏さまが阿彌陀仏の徳をほめたたえる段が置かれた理由と、この經の結びに、他力の教えを「難信の法」と呼ばれたことの意味について講じていただきます。

### 【註釈本文】 ▼二二五頁

【六】 舍利弗、われいま阿彌陀仏の不可思議の功徳を讚歎するがごとく、東方にまた、阿閼鞞仏・須弥相仏・大須弥仏・須弥光仏・妙音仏、かくのごときらの恒河沙数の諸仏をましまして、おのおのその国において、広長の舌相を出し、あまねく三千大千世界に覆ひて、誠実の言を説きたまはく、へなんぢら衆生、まさにこの不可思議の功徳を称讚したまふ一切諸仏に護念せらるる經を信すべし」と。(中略)

### 【現代語訳】 ▼浄土三部經(現代語訳)二二四頁

【六】 舍利弗よ、わたしが今、阿彌陀仏の不可思議な功徳をほめたたえているように、東方の世界にも、また阿閼鞞仏・須弥相仏・大須弥仏・須弥光仏・妙音仏など、ガンジス河の砂の数ほどのさまざまな仏がおられ、それぞれの国でひろく舌相を示して、世界のすみずみにまで阿彌陀仏のすぐれた徳が真実であることをあらわし、まごころをこめて、へそなたたち世の人々よ、この《阿彌陀仏の不可思議な功徳をほめたたえて、すべての仏がたがお護りくださる經》を信じることがよい」と仰せになっている。(中略)

### ■諸仏の証明

前段の終りに、念仏往生の法義について、「われこの利を見るがゆゑに、この言を説く」との釈尊自身による力強い証明の言葉が述べられていましたが、さらに諸仏方の証明をも付け加えているのが、証誠段と呼ばれる一段です。この鳩摩羅什訳では六方段ですが、玄奘訳では十方段となつています。

釈尊は、なぜ諸仏の証明をわざわざ付加されたのでしょうか。それは、私たち凡夫が疑い深く、釈尊お一人の言葉だけでは、容易に信じようとしないからです。

私たち凡夫の言い分ならともかく、釈尊のお言葉を信じないなんてことがあるかと思ふかも知れません。しかし、私たちは、釈尊のお言葉も疑つてかかります。「浄土なんて本当にあるのだろうか」「お念仏だけでさとりをひらくなんて、本当にできるのだろうか」。凡夫の迷心だけではありません。高名で勝れた高僧たちにおいてさえ、こういう疑心が起るのです。その一例が、善導大師の時代、撰論家の人々たちでした。

彼らは無著菩薩の書かれた『撰大乘論』を基本にする学派でしたから、「撰論家」とか「撰論学派」と呼ばれています。『撰大乘論』には、「願行具足」と言つて、物事が成り立つには、

まず願いがあつて、そしてそれに伴う行動があつてこそ初めて出来上がるとする道理が示されています。例えば、家を建てるには、まず「家を建てたい」という願ひが必要です。しかし願ひだけでは家は建ちません。家を建てるだけの資材と技術があるか、あるいは代りに建ててもらうだけの財力があるか、何れにしても「行動」が伴わなければ家は建たないので、この道理自体は正しいものです。

しかし撰論家の人々は、『觀經』に説かれる念仏を、浄土に往生したいという「願ひ」だけであつて、それに見合つた「行」ではないとして、「唯願無行」と主張したのです。そして、「念仏往生」とは、本当は念仏だけでは往生できないが、それでは凡夫は入り口にも入れないので、釈尊は、とにかく修行の入り口だけにでも入るようにと、さも念仏だけで往生できるように説いた「別時意」の説法(遠い未来〈別時〉に得る利益を即時に得られるかのよう説くこと)だと主張したのでした。

善導大師は、これに真っ向から反論しました。そこで引用されたのが『阿彌陀經』の修因段と、今の証誠段です。修因段では「念仏往生」の義が明示されており、經説にある事柄を、『撰大乘論』という菩薩の論書を自分勝手に解釈して疑うとはけしからんとし、ひとえに仏語に随順すべきことを述べられます

〔前号参照〕。そして証誠段の引用とは、諸仏の証明があることによつて、釈尊だけの勝手な言い分の「別時意」ではないことを論証しているのです。善導大師は、さらに「唯願無行」への反論として、「願行具足」の六字釈を施されました。大師の『観經疏』には、こういう一連の論理が述べられています（七祖三三二―三三五頁）。

この証誠段が説かれたのは、釈尊の言葉だけでは末代の凡夫は信用しないと見通されたからと言えましよう。

また、別の意義としては、仏教における「諸仏」の思想には、独断性・独善性の否定の意味もあると言われています。私たちが

【一二】 舍利弗、なんぢが意においていかん。なんがゆゑぞ名づけて一切諸仏に護念せらるる経とするや。舍利弗、もし善男子・善女人ありて、この諸仏の所説の名および経の名を聞かんもの、このもろもろの善男子・善女人、みな一切諸仏のためにともに護念せられて、みな阿耨多羅三藐三菩提を退転せざることを得ん。このゆゑに舍利弗、なんぢらみなまさにわが語および諸仏の所説を信受すべし。舍利弗、もし人ありて、すでに発願し、いま発願し、まさに発願して、阿

は、自分の側に正義を保持しようという独善的性格があります。つねに「自分が正しい」と思っています。しかし、この「正義」が独善化するところから戦争や紛争が起るのです。お互いが「正しい」と主張するからけんかや争いが起るのです。別々の「神」を、お互いが「正しい」と主張すると、議論は永遠に平行線のままで、それに決着をつけようとすれば実力行使しかなくなりまます。一神教ではなく、諸仏思想を持つ仏教は、正義の独善化を相対化させる教えでもあります。真の平和の理念は、仏教にこそ期待されるのではないかと思ひます。

【一二】 舍利弗よ、そなたはどう思うか。なぜこれをへすべての仏がたがお護りくださる経」と名づけるのだろうか。

舍利弗よ、もし善良なものたちが、このように仏がたがお説きになる阿彌陀仏の名とこの経の名を聞くなら、これらのものはみな、すべての仏がたに護られて、この上ないさとりに向かつて退くことのない位に至ることができ。だから舍利弗よ、そなたたちはみな、わたしの説くこの教えと、仏がたのお説きになることを深く信じて心にとどめるがよい。

舍利弗よ、もし人々が阿彌陀仏の国に生れたいとすでに願ひ、また

阿彌陀仏国に生れんと欲はんものは、このもろもろの人等、みな阿耨多羅三藐三菩提を退転せざることを得て、かの国土において、もしはすでに生れ、もしは生まれ、もしはまさに生れん。このゆゑに舍利弗、もろもろの善男子・善女人、もし信あらんものは、まさに発願してかの国土に生るべし。

は今願ひ、あるいはこれから願うなら、みなこの上ないさとりに向かつて退くことのない位に至り、その国にすでに生れているか、または今生れるか、あるいはこれから生れるのである。

だから舍利弗よ、仏の教えを信じる善良なものたちは、ぜひともその国に生れたいと願うべきである。

### ■阿彌陀如来はいつでも

六方諸仏の称讃を説き終えるや、釈尊は、再度、「舍利弗、なんぢが」と、舍利弗に問いかけます。そして、この時も、舍利弗からの答えはなく、釈尊自らによつて、その理由が説かれています。そこでは、諸仏称讃の阿彌陀の名号を聞くことによつて、諸仏に護念されて不退の位に定まるという「聞名不

退」の法義を示し、「護念経」と言われる所以を説き明かしています。

だからこそ、この阿彌陀仏の法を信受すべきことを勧められるのですが、そこにおいて、「已（すでに・過去）」「今（いま・現在）」「当（まさに・未来）」の「発願」が説かれるのは、阿彌陀如来は、いつでも待ち受けてくださっていて、いつでも間に合った法義であり、この「已・今・当」の「発願」によつて、「已・今・当」の「往生」があることを説き示しています。

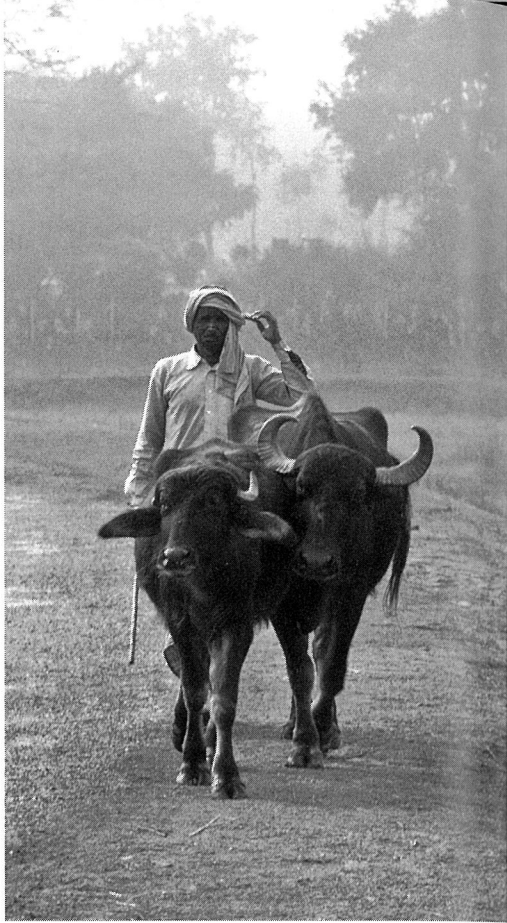
親鸞聖人は『阿彌陀経』の和讃を五首詠まれています（五七一頁）。その内の第一首は名義段の内容でしたが、残る四首は証誠段の内容であり、証誠段の法義を重視しておられたことが窺われます。私たちが、この証誠段を、しっかりと味読せねばなりません。



【二三】舍利弗、われいま諸仏の不可思議の功徳を称讃するがごとく、かの諸仏等もまた、わが不可思議の功徳を称説してこの言をなしたまはく、〈釈迦牟尼仏、よく甚難希有の事をなして、よく娑婆国土の五濁悪世、劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁のなかにあって、阿耨多羅三藐三菩提を得て、もろもろの衆生のために、この一切世間難信の法を説きたまふ〉と。舍利弗まさに知るべし、われ五濁悪世においてこの難事を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間のために、この難信の法を説く。これを甚難とす」と。

### ■「難信の法」とは？

ここまで見てきたように、『阿弥陀経』においては、依正段・因果段によって、釈尊が阿弥陀仏の功徳を讃え、続く証段では、諸仏が阿弥陀仏の功徳を讃嘆し、そのことを通して、釈尊が諸仏の功徳を称讃してもいました。今度はさらに、諸仏



てくると世の中が乱れ、濁ってくるというのです。テレビや新聞などを見ても、以前では想像さえできなかった凶悪で悲惨な事件が多発しているように思えます。「見濁」とは見解の濁り。情報がさまざまに氾濫し、価値観が多様化することによって、何が真実なのかが見失われています。「煩惱濁」とは、時代が下るごとに煩惱が盛んになるということです。次々に便利なものができ、それだけ欲しいものが増えて、煩惱が肥大化していきます。消費は美德などと煩惱をあおり、それが環境破壊を招き、電力消費を増やして原発依存へと陥ったのです。「衆生濁」とは、衆生の根拠が落ちてくること。親鸞聖人は、『正像末和讃』で五濁の意味を詠まれています。『衆生濁』のところを、「毒蛇・悪龍のどくなり」（六〇二頁）と述べています。「蛇」や「龍」は、どちらも曲りくねった生き物です。

【二三】舍利弗よ、わたしが今、仏がたの不可思議な功徳をほめたたえているように、その仏がたもまた、わたしの不可思議な功徳をほめたたえてこのように仰せになつてゐる。〈釈迦牟尼仏は、世にもまれな難しく尊い行を成しとげられた。娑婆世界はさまざまに濁りに満ちていて、汚れきつた時代の中、思想は乱れ、煩惱は激しくさかんであり、人々は悪事を犯すばかりで、その寿命はしだいに短くなる。そのような中にありながら、この上ないさとりを開いて、人々のためにすべての世に超えすぐれた信じがたいほどの尊い教えをお説きになつたことである〉舍利弗よ、よく知るがよい。わたしは濁りと悪に満ちた世界で難しい行を成しとげ、この上ないさとりを開いて仏となり、すべての世界のもののためこの信じがたいほどの尊い教えを説いたのである。このことこそ、まことに難しいことなのである」

が釈尊の徳を讃嘆する一節へと展開します。その讃嘆の内容は、釈尊が五濁の世にあつてさとりをひらき、「難信の法」である阿弥陀如来の法義を説いたことを、甚だ稀なことと褒め讃えたのです。

「五濁」とは、具体的には、劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の五つです。「劫濁」とは時代の濁り。時代が下つ私たちも右往左往と曲りくねった生き方をしています。また「毒」とか「悪」とかは、蝮やハブのような毒蛇は、咬んだから毒蛇なのではなく、咬もうが咬むまいが毒蛇だということです。覚如上人の『拾遺古徳伝』に、「つくるもつくらざるもみな罪体なり、おもふもおもはざるもことごとく妄念なり」（真宗聖教全書三、七三三頁）とあります。縁に触れたら何をするかわからない、同じものを持つてゐるのです。「命濁」とは、寿命が短くなるという濁りです。平均寿命は延びてゐるではないかと思うかも知れませんが、しかし私たちは、今さえ良ければいいという利那主義の短い人生を送つてゐるのです。

次に、この『阿弥陀経』の説法を「難信の法」と称してゐます。「難信」については、古来二つの義があるとされています。一つは法の尊高をあらわし、二つに自力を誠めることと言われている。

法の尊高をあらわすとは、有ること難い法義であることによつて法の崇高さをあらわします。やすからう悪からうの世間の価値観とは違ふということですが。

自力を誠めるとは、「正信偈」に「難のなかの難」（二〇四頁）とあるように、邪見・憍慢の悪衆生には、他力の法は「難のなかの難」です。「信文類」には、「難信」の理由について、「い

まし如来の加威力によるがゆゑなり、博く大悲広慧の力によるがゆゑなり」(二二頁)として、「他力」だから「難信」なのだという論理を示されています。「他力」だから「易しい」というのなら理解しやすいところですが、「他力」だから「難信」というのが親鸞聖人の論理です。つまり、これは、方向性が違うからです。如来さまからこちらに向かっている他力の方向性と、私たちが向かおうとする自力の方向性とは正反対です。手前に引いて開くドアは、いくら押ししても開きません。大相撲の白鵬や把瑠都なら開くのかも知れませんが、その場合は、開く

【一四】 仏、この経を説きたまふこと已りて、舍利弗、およびもろもろの比丘、一切世間の天・人・阿修羅等、仏の所説を聞きたまつりて、歡喜し信受して、礼をなして去りにき。  
仏説阿弥陀経

【一四】 このように仰せになつて、釈尊がこの教えを説きおられると、舍利弗をはじめ、多くの修行僧たちも、すべての世界の天人や人々も、阿修羅などもみな、この尊い教えを承つて喜びに満ちあふれ、深く信じて心にとどめ、うやうやしく礼拝して立ち去つたのである。  
仏説阿弥陀経

■流通分―他力の法義を末代まで

一般的に、このほんの数行が流通分だと言われています。しかし、そうだとすると、ここには釈尊の説法に当る文言がなく、

「二代結経」の意をそこに見ています。聖道一代の経が「化前序」(教化が行われる以前の序説)であることを、『大経』の八相化儀(五頁)において明かされていると見、『大経』・『観経』を正宗分(本論)、そして『阿弥陀経』を流通分と見る、壮大な浄土三部経観を提示されています。

傾聴すべき卓見ですが、いささか私見を申し述べますと、前段の諸仏互讃のところを、もう一度振り返つていただけませんか。舍利弗、われいま諸仏の不可思議の功德を称讃するがごとく、かの諸仏等もまた、わが不可思議の功德を称説して(中略)、(釈迦牟尼仏、よく甚難希有の事をなして、よく娑婆国土の五濁悪世、劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁のなかにおいて、阿耨多羅三藐三菩提を得て、もろもろの衆生のために、この一切世間難信の法を説きたまふ)と

と説かれたあとにすぐ、舍利弗まさに知るべし、われ五濁悪世においてこの難事をなして、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間のために、この難信の法を説く。これを甚難とす」とと、ほとんど同意文が続いています。今まで見てきたように、この『阿弥陀経』のご説法は、きわめて論理的に、隙なく説き

というより、壊すというべきでしょう。如来さまからこちらに向かっている法義に対して、こちらが擱もうとするから遇えないのです。これが「難信」で、『阿弥陀経』が、顕説の上では第二十願の法義と見えるところもありますが、隠彰では第十八願の法義であることは、今の「難信の法」という語があることでわかります。「他力」だから「難信」であるということは、「難信の法」として説かれる『阿弥陀経』は、他力弘願の法だということになります。『阿弥陀経』は、根底には、あくまで他力弘願の法が貫徹しているのです。

流通分とは、元来、説法の要点・結論を説かれる所のことですから、少し不自然な感じがします。そこで、先哲方は、今の流通分に釈尊の説法がないことについて、『阿弥陀経』全体が、釈尊の説法の流通分であり、釈尊の結論の經典であるという

示されていました。それなのに、ここだけ、こういう屋上屋を重ねるようなことがあるでしょう。しかも、二番目の文には、「舍利弗まさに知るべし」として、舍利弗に念を押す呼びかけがなされていることに注意したいと思つていきます。全くの個人的見解ですが、この「舍利弗まさに知るべし」以下が、『阿弥陀経』の流通分ではないかと思えるのです。この経の結論を「難信の法」と締めくくり、他力難信の法義を末代まで伝えようとされた釈尊の思召しがかがえるように思えます。

少し端折つたところもありますが、何とか五回にわたつての務めを果して参りました。『阿弥陀経』には、多くの参考図書が出版されています。私も、それらの先行研究に導かれてきました。私の拙文を通じて、『阿弥陀経』に関心を持っていただけたら、是非、多くの本を読み進めて、少しずつ学びを深めていただきたいと思います。

学習のポイント

- (1) なぜ釈尊は「証誠段」を説かれたのでしょうか。
- (2) 他力の教えが「難信の法」といわれるのはなぜでしょうか。